



香港特集

「香港の今を知り、演劇で繋がる」

ワークショップ1日目

2020年12月19日（土）14：00～17：00（Zoom）

■ 参加者の自己紹介

○司会・佐川大輔 では始めたいと思います。最初に軽く自己紹介をします。日本演出者協会国際部の佐川と申します。今回の香港特集の担当をしております。宜しくお願い致します。今回の事業は、文化庁の育成事業となっています。本来ならば8月にアンドリューさんに来日していただいてワークショップをする予定だったのですが、残念ながらコロナということで、このような状況（Zoom）で行っております。

今回のちょっとしたルールについてですが、Zoomでのワークショップですと、発言がどうしても同時にはできないので、質問が限られてしまいます。参加者の方も、見学者の方も、色々質問があるかと思いますが、基本的に質問は、Q&A^{※1}に書き込んでください。アンドリューさんが資料をシェアしたいときや、全体へのアナウンスがあるときは、チャット^{※2}を使わせていただこうと思います。

※1 ※2 共にZoomの機能。

○司会 それでは始めます。今回の講師、アンドリュー・チャンさんです。

(拍手)

○アンドリュー みなさん、こんにちは。私の日本語はまだめちゃくちゃです。まだ下手です。広東語で話します。すみません！（と、日本語であいさつ）

○司会 今回は残念ながら、こういったオンラインでのワークショップになりましたが、来年はアンドリューさんに来日してもらう予定ですので、是非みなさん、来年も参加していただきたいと思います。

○アンドリュー 日本演出者協会の皆さん、お招きいただきありがとうございます。普段ワークショップをするときには、私の芝居の創り方や演出の仕方を実際に皆さんに体験してもらいますが、今回は生憎オンラインということで、どのような形にするか考えました。そこで、やりたいことを2つ思いつきました。まず、日本人は香港というものを、ニュースでしか見ないでしょうし、芸術方面でも香港映画を思い浮かべるぐらいでしょう。香港演劇はあまり知られていないと思いますので、このワークショップでは、香港の演劇事情と私の劇団についてお話したいと思います。そして2つ目、私は創作が好きなので、このワークショップの最終日に、皆さんと一緒に創作をしたいと考えています。台本を書いていただく形になるのですが、私の作品、『香港三人姉妹』を通して、皆さんにも“自分の『日本三人姉妹』”というテーマで作品を創っていただきたいと思っています。

私は以前、一度だけオンラインリーディングをやったことはあるのですが、オンラインセミナーをするのは初めてです。通訳に時間がかかってしまうと思います。申し訳ありませんが、宜しく願い致します。普段ワークショップをやるときは、最初に参加者とアイスブレイクをして、もっとみなさんのことを知ってから始めます。今回アイスブレイクゲームはできないので、みなさんに1つ質問をしたいです。1人ずつ答えていただ

きたいと思います。その前に1点。香港人と日本人では話すときの雰囲気はかなり違うと思います。香港人の会話は日本人よりストレートで、カジュアルな印象です。あまりかしこまって話しません。私の話し方はきついつと感じられるかもしれませんが、皆さんのことはリスペクトしていますから、どうかお許してください。それでは、アイスブレイクの質問をしたいと思います。皆さんはどこに魅力を感じてこのセミナーに参加したのでしょうか？ 思いついた方からお答えください。

○**参加者A** 私はちょうど去年、1年前の12月、香港文化センターに自分の劇団の芝居を呼んでいただき、上演したんです。アンドリューさんとはその前にも一度自分の劇団の芝居を見に来ていただいて一緒にお酒を飲んだり、交流があったので、アフタートークでアンドリューさんに司会をやっていただきました。アンドリューさんは、常にとても明るい方なんです。日本の演劇人は結構内にこもっていたりしますが、非常にオープンで明るい人です。アンドリューさんの作品を観たことがなく、どんな作品を創っているのか興味があったので参加しました。

○**アンドリュー** (日本語で) ありがとう。懐かしいね、去年！ では、次の方。

○**参加者B** アンドリューさんのことは存じ上げていなかったのですが、この国際部のセミナーに以前参加して面白かったので、今回はどんな人が講師かなと気になり参加しました。『香港三人姉妹』の映像を拝見して、「200年後の後輩に向けて」という台詞がとても印象に残り、素敵だなと思いました。

○**参加者C** 高知県で演劇をやっています。海外の演劇に触れる機会がほとんどないので、今回は、アンドリューさんが同じアジアでどんな演劇をされているのかということに興味があって、受けることにしました。宜しくお願いします。

○**参加者D** 私は福岡県に住んでいます。ロシアの国立演劇大学で舞台演出の研修を3年間受けました。香港の方も日本人も大きく捉えると世界的にはアジアの演劇人ということになると思いますが、例えば日本だったら、能や狂言という伝統芸能があって、今から100年ほど前にフランスやロシアやドイツに行ってきた人が、現代演劇というヨーロッパの近代演劇を始めたわけですが、アジアの演劇というのは、どこも、古典的、伝統的な芸能を近代化するところで多くの課題があるように思います。私たちの生活様式はヨーロッパとほとんど変わらないようになってはいますが、精神的なあり方などは、かなりヨーロッパ人と違うところがある。にも拘らず、現代の演劇はやはりヨーロッパの演劇だと思うのです。現代的な演劇をどういう風にアジア人がやるのか。『香港三人姉妹』を観る限り、アンドリューさんもそれをすごく探求しているし、東洋的な考え方や

身体を持っている人たちが、現代演劇、つまりヨーロッパ演劇の中で、どう演技や演出をしてゆくのか。そのようなことを勉強できる機会になったらいいなと思っています。

○アンドリュー 明日、『香港三人姉妹』の制作をするときのコンセプトと過程について詳しくお話します。そのときに恐らく、質問に答えられると思います。

○参加者E 私は香港出身で、日本に留学しています。香港にいるときも、色々な劇団の作品を観ていました。香港の演出家と話したこともあります。今回はせっかくの機会なので応募しました。

○アンドリュー 広東語はわかりますか？

○参加者E (広東語で) はい、わかります。

○参加者F 演出家です。このセミナーに参加した理由は大きく分けて3つあります。1つ目は、私が『三人姉妹』に非常に縁が深く、自分でも色々やっているということ。2つ目は、今香港の社会で起きていることに非常に興味があり、その中で社会的な演劇を創っていらっしゃるアンドリューさんのお仕事に興味を持ったからです。3つ目は、すでにあるクラシックのテキストを使って、再構築するという舞台の創り方は私も知っているので、この『香港三人姉妹』をとっても興味深く拝見しました。以上の3つです。

○参加者G 東京のすぐ近くの川崎市から参加しています。私にとって世界で活躍している演劇人はすべて魅力的です。私の中で香港というところは、常に新しいものが生まれているというイメージです。美味しいもの、新しいもの、かっこいいもの、オシャレなもの……そういうものが生まれ、そして交錯している街というイメージです。そんなワクワクする場所で演劇をやっているアンドリューさんに、とても興味と魅力を感じます。『三人姉妹』の台詞も非常に力強く感じましたので、色んなことを勉強したいと思っています。

○参加者H (英語) お会いできて光栄です。香港の状況についてとても興味があります。香港は今、世界の焦点です。演劇、パフォーマンス、演技は国際的な言葉だと思っています。なので、このワークショップに参加することが楽しみでした。

○参加者I 日本演出者協会の国際部に所属しています。このワークショップのことは、昨年、企画の段階でアンドリューさんのことを知って以降、ずっと気になっていまし

た。僕は、ブレヒトとチェーホフで育ったと言ってもいいぐらいです。アンドリューさんと同年なので、そこがまたとても興味深いというか。同年で、ブレヒトとチェーホフを学んで、違った国に住んで、違った環境で生きてきた僕たちが、どこが同じで、どこが違うのか。香港にも非常に興味があります。2047年以降、香港がどうなるのか、今、これからどうなるのか、非常に興味がありましたので参加しました。宜しく願いいたします。

○**参加者J** 愛媛県松山から参加しています。政治的圧力とコロナ禍で、香港というところは、今非常に窮屈じゃないかと想像するのですが、そのような中で、一流の香港の表現者の方はどのようなことを思われているのか、どのようなストレスを抱えているのか、そもそも表現というものをどう考えてらっしゃるのか、そのようなことを知りたくて参加しました。

○**参加者K** 『香港三人姉妹』の動画を拝見して、自然主義的な演技の部分と様式的な演技の部分が、ものすごく美しく融合していたことに感銘を受けました。チェーホフに対して、単に自然主義的な演技で構成するとなにかしら違和感を覚え、なにか表現しきれていないようなフラストレーションがあったのですが、アンドリューさんの舞台を拝見して、とても刺激をいただきました。コロナによって、日本の芸能の世界では、動画、映像の方に多くの俳優がシフトしていく状況で、いかに自然に見せるかというところを深掘りしてトレーニングしていかなければいけない状況になっているんですけども、アンドリューさんの舞台には、新しい時代の舞台表現の可能性がすごくあるなと思いました。

○**アンドリュー** 皆さん、色々話してくださってありがとうございました。それでは、ここからは私の番です。話の中で、画像も使いつつ、説明したいと思います。皆さんに香港のことを気にしていただき、本当に感謝しております。正直言うと、今ちょっと泣きたくなりました。

それでは、始めたいと思います。まず、香港演劇についてお話ししたいのですが、香港演劇と中国演劇は深い関わりがあります。そして、中国演劇は日本演劇に深く関わっています。このワークショップは香港特集ということで、全体的な時系列をお話したいと思います。では、パワーポイントを使って説明します。途中で疑問があったら質問してください。

■ 中国と香港における演劇の発展

○アンドリュー 今回のワークショップのタイトルは、「アンドリュー・チャンの劇場美学、あなたの『三人姉妹』を探して」。まず、中国と香港における演劇の発展について、要約してお話します。

皆さん、この写真を見たことがありますか？ この写真は、中国と香港の演劇にとって歴史的に重要なものです。この2人は中国人ですが、写真を撮った場所は日本です。1906年に日本に留学した中国人が、東京で演劇を研究するために「春柳社」※3という演劇サークルを立ちあげました。これはそのときの写真です。この演劇サークルのメンバーは中国演劇の重要人物で、メンバーの4人は、その後香港に演劇を伝授しに来ました。左は創立者の李叔同（リーソットン）、右は曾孝谷（ジャンハウゴッ）といます。李叔同は男性ですが女装をしています。この服装は、1907年の春に、中国青年会が開催したチャリティー遊芸会で、フランスの作家アレクサンドル・デュマの



『椿姫』を上演したときのものです。このとき、新派の名優、藤沢浅次郎さんが顧問を担当していました。どうして中国人が日本に留学したのか。清の末期、中国はとても弱かった。中国の若者たちは色んな国に留学して外国で学び、自分の国を救おうとしました。特に日本では、明治維新という革新的な改革があったため、清の末期には多くの学生が日本に留学しました。そのとき彼らは、中国には古典の芝居しかないということに気がきました。日本の能と歌舞伎みたいな伝統芸能ですね。それに気付いた留学生たちは、新しいもの、昔の伝統を翻すようなものを創りたいと思った。演劇は彼らにとって、芸術だけではなく、改革や革命、人の思想を刷新するようなものでした。

※3 春柳社（しゅんりゅうしゃ）1906年（明治39年）に中国からの留学生により東京で設立。1907年2月に『茶花女（椿姫）』、7月に『黒奴籲天録（アンクルトムの小屋）』を上演し中国話劇の嚆矢となる。辛亥革命後は中国に戻り1915年まで活躍した演劇団体。

『椿姫』は外国の作品ですが、その後彼らは自分たちで『黒人奴隷の叫び』という戯曲を書きました。ハリエット・ビーチャー・ストウの『アンクルトムの小屋』を原作にした戯曲で、当時の話し言葉で書かれました。当時の中国は書き言葉と話し言葉が分かれていて、普段文章を書くときは書き言葉を使用していましたが、この戯曲は話し言葉で書かれています。春柳社のメンバーの欧陽（オウヨウ）はこう言いました。「これは

中国話劇史上最初の創作劇と見なされる作品だ」。この公演は当時の東京で大ヒットして、中国国内でも話題になったそうです。1911年、辛亥革命のあと、春柳社のメンバーたちはみんな帰国しました。この経緯を見れば、中国の近代演劇と日本が深く関わっていることがわかります。中国の近代演劇は、日本で誕生したものだだったのです。



この写真は、当時の春柳社メンバーの写真です。その後、中国で新文化運動が起きました。この運動は1910年代から1920年代の始めまで、西洋の教育を受けた若い学者たちが旧道徳、旧文化を打破したいという思いで引き起こしたものです。

こちらがそのメンバー（スライドに胡適、陳独秀、魯迅、錢玄同、蔡元培とある）で、中国にとって非常に重要な文学者と思想家たちです。その中でも魯迅は日本の皆さんもよく知っていると思います。日本との縁がとて深い方でした。陳独秀（チン・ドクシュウ）は早期の共産党員でした。彼らは社会主義を中国に導入しました。ちょうどリアリズム、現実主義を使った作品が流行りだした頃です。



《雷雨》曹禺
——1933年

《上海屋檐下》夏衍
——1937年

《茶館》老舍
——1956年

この3枚の写真は中国でも有名な演劇作品です。左は曹禺（ソウ・グウ）の『雷雨』。曹禺は西洋の影響を受けており、封建社会を鋭く批判する思想家です。中央は夏衍（カ・ユー）の『上海の屋根の下』。右の老舍（ロウシャ）『茶館』は、古い時代から新しい時代への変化を描いた作品です。

80年代、ブレヒトの不条理演劇が紹介されました。60年代の終わり、中国では文化大革命という運動が起きて外国文化の流入が中断されたのですが、運動が終わったあと、80年代からまた再開されました。（スライドを指し）左の本は『ブレヒト演劇論』。これは私にとって非常に重要な本です。私はこの本で初めてブレヒトの演劇論を勉強しました。右の本はマーティン・エスリンの『不条理の演劇』です。私が持っているのは中国内地で出版されたものですが、面白いことに、政治的な事情で検閲があったからか、ハロルド・ピンターの作品は全部削除されました。

その後中国では、中国小劇場という運動がありました。左の人物は林兆華（リン・チョウカ）。現代中国では有名な演出家です。右は高行健（コウ・コウケン）。2000年にノーベル文学賞を受賞しましたので、世界的にも非常に有名になりました。80年代、林兆華と高行健はよく作品を共同制作しましたが、高行健は医者 of 誤診でガン宣告を受け、失望してフランスに移住しました。2人が創った『絶対シグナル』という作品は、当時としては斬新でした。従来のプロセニウム舞台ではなく、とても実験的で、小劇場で上演されました。この作品は、回想やモノローグを組み合わせて創られており、中国小劇場の始まりとも言われています。その後高行健は、不条理演劇をたくさん書き下ろしました。



そしてこちらは、さらに近代の演劇人、孟京輝（モウ・キョウキ）。彼が創っているのは「先鋒演劇」、斬新で前衛的な演劇です。彼はもともと国語教師になる勉強をしていましたが、途中でやめて北京中央演劇学院に入学しました。その卒業公演はベケットの『ゴドーを待ちながら』で、暴力的な表現などを使い、とても注目されました。面白い作品をたくさん創っていて、オーストリアの作家ペーター・ハントケに影響を受けて、語りを中心にした劇を主にやっています。左の写真は、『XXXを愛してる』※4という作品です。この作品には、「ドラマ」も「役」というものもありません。ただ画像や映像を使い、「XXX」の部分を経々な言葉に入れ替えて、「～を愛してる」ということだけを語っている、ポストモダン的な作品です。右の『恋するサイ』という劇はラブストーリーですが、スタニスラフスキー方式ではなく、プレヒトの異化効果を使って、歌やイメージで表現しました。当時の中国、特に北京の演劇は叙事的な演劇が多かったため、この作品の演出は観客にとって斬新でした。『恋するサイ』はセンスもよく、若者の人気も集めました。

※4 『XXXを愛してる』（I LOVE XXX）は、東京でも1995年の第13回アリスフェスティバルで、戯劇穿幫（北京）公演として孟京輝の演出で上演され、話題となった。

(スライドを指し) これは10年前、北京国際青年演劇祭に参加したときの写真です。そして、烏鎮(ウチン)演劇フェスティバル。烏鎮は杭州の近くにある観光名所で、景色がきれいなところですよ。台湾の有名な演出家、賴聲川(ライ・セイセン)と中国が共同開催したフェスティバルで、鈴木忠志も参加したそうです。

■ 香港の演劇事情

香港では「話劇」という言葉を使って、作品を分類しています。日本語の「演劇」と同じ意味です。しかし、香港の若い演劇人は、この「話劇」という言葉をあまり使いません。「話劇」の「話」は、言語、言葉という意味で、会話劇を示しています。ですが近年では、言葉だけではなく、動きやダンスを使った作品が多いので、「話劇」ではなく「劇場」という言葉を使いたいと、彼らは思っています。海外から中国に演劇が入ってきたとき、イブセンなどの会話劇が多かったため、「話劇」という言葉が誕生したと思われます。

それではここからは、香港の演劇事情についてお話します。香港はイギリスの植民地だったので、早い段階で演劇は香港に伝わってきました。しかしそのほとんどが、外国人による制作で、外国人観客のためのものでした。1908年、広州から「文明劇」というスタイルの演劇が伝わってきました。ここでの「文明」という言葉には、前進的という意味合いがあります。「文明劇」は話し言葉を使った芝居ですが、広東オペラも含まれます。純粋な話劇が誕生したのは30年代の始めからです。40年代、知識人たちによって、話劇やその技術が中国本土から香港に流入しました。世界大戦が終わって中国は内戦になり、国民党は台湾に逃亡、共産党が正式に中国を統治し始めたとき、多くの知識人が中国から香港に逃亡したからです。

6、70年代、話劇には5つのタイプがありました。①興行収入がありそうな作品 ②スター俳優を使った作品 ③教会が出資した布教目的のための作品 ④学校の演劇部が創る作品 ⑤政府からの助成金で創る作品、以上の5つです。1967年、香港暴動が起きました。中国本土では文化大革命。暴動の後、植民地政府は、以前よりも若者の文化と娯楽に関心を持つようになりました。また、社会福祉も見直されました。政府は民衆の怒りを鎮めるために、様々な政策を練りました。69、70年には、青年演劇フェスティバルで「1香港ドル観劇イベント」を行いました。これはとても重要なイベントで、私の演劇人の先輩たちは、このイベントで育てられました。1968年には、11の中学校が連合演劇部を創立し、翻訳劇ではなく、自分たちで台本を創作することを提唱して、中学校演劇コンクールを開催しました。また、当時の地方議会が主催した大学演劇フェスティバルもありました。現代の香港における重要な演劇人たちの多くは、この大学演劇フェスティバルの出身者です。